本にしてこの經の性質に言及したが、此の關係はこれを逆にして、かゝる景經典の存在したといふことから、新たに景教碑文の解釋に及ぶべき所も少からぬと考へる。

尙注意すべきことの一つは、151—155 に亙る間に、弟子諸聽衆が天下に散じて此の經を行はゞ、能く君王の爲に境界を安護せんといひ、また君王の尊貴を說いて高山に比し、此の經の利益を以て高山上の大火に喩へ、君王の尊貴と經の利益とを結びつけて居ることであり、次にまた 34—37 の六識の記述及び、64—70, 72—73, 76—77 行あたりの說き方の、如何にも佛教的＝先祖の業の此の代に報い來るべきことは基督教聖典中、例へば馬太傳二三ノ三六にも記されてある所ではあるが＝であることである。帝王の尊貴を說くことは、彼得前書二ノ一七にも見え、唐に於ける景教が極端にこれを唱へたことは、既に序聽迷詩所經の解說に於ても述べたところであつて、⑫こゝにも迷師訶の言として、かく記して居ることを注意すれば足りる。たゞ聖書に（馬太傳二八ノ一九、二〇、その他）イエスが使徒に告げて、「爾曹ゆきて萬國の民にパプテスマを施し、……且わが凡て爾等に命ぜし言を守れと彼等に教へよ」とある形をとつて、「汝等弟子及諸聽衆散於天下、行吾此經、能爲君王、安護境界」といふて居るのに興味を覺える。また唐に於て景教が佛教に關連して教義を說いた跡のあることも、同じく序聽迷詩所經の解說に於て述べた通りであるが、⑬こゝにも其の片鱗を顯はしたものと見るべきである。

## 五　結　語